



序 文

阿波学会会長 小林 勝 美

美馬市木屋平は剣山に連なる自然豊かで、歴史的文化的景観が今も残る地域である。一方では、現代の激動する時代の流れの中で、過疎化、少子化、高齢化の3点セットが顕著で、「限界集落」そのものである。この木屋平で、平成19年12月2日(日)に阿波学会総合学習調査発表会が開催され、発表後の質疑の中で、自然環境保全と文化遺産を過疎の中、どう保存と顕彰をして行くかについて、牧田市長、三島教育長はじめ、地元の方々の積極的な意見が発表され、応答の阿波学会員との間で、熱い討論が繰り広げられた。この意見交換は、阿波学会が長年目標としていた現地調査をどのように地元の人々へ伝え、行政の中に生かしていくべきかの課題と、地域貢献への観点からも有意義な発表会となりました。そして、地域の人々も将来への生活不安や伝統行事等の伝承に強い関心をもっていることを再確認させられた一日となりました。

平成19年度阿波学会美馬市木屋平総合学術調査は平成19年7月27日(金)の結団式から8月5日(日)までの10日間を中心に、16学会18班106名前後の学会員が参加して調査が実施されました。本年の猛暑の中、慣れない山間部での現地調査となりましたが、地元の人々の温かさや、親切・協力に支えられ、さらには、美馬市の牧田 久市長、三島 茂教育長、教育委員会生涯学習課及び木屋平分室の方々の全面的な支援体制をいただき、充実した、実り多い学術調査となりましたことに感謝申し上げます。

私も木屋平の板碑調査で参加し、年代の刻銘された記年銘板碑が多数保存(『木屋平村史』は12基報告)され、それぞれが各集落に造立され、記年銘板碑を中心に、製作資材も含め20~30基と存在していることに驚きました。板碑は中世の人々の供養塔で、記年銘の時期からその土地に住みつき、生活活動を行って来た証である。特に、木屋平は三木家を中心に、徳島県指定の中世古文書類が多数保存され、「アラタエ」の貢進は有名である。現当主の三木信夫氏は講演の中で、「木屋平の自然と気候の中でこそ生育させた大麻で織った製品そのものが『アラタエ』である」と断言され、集落民の協力と助力が不可欠であったことが古文書でも証明されている。中世の三木家を支えた住民がいつの頃からか山間部を切り開き、生産活動に助力した史実と、最近の考古学用語のワーカヴィレッジは栽培に従事した集落民の居住区が注目されるようになった。まさに、三木家中世古文書史料と同時代の記年銘板碑の存在は歴史的に高く評価される。ただ、板碑は移動が可能な文化財遺物であるため、歴史的検証は必要であるが、木屋平の歴史的地理的背景を考察した時、現地保存と顕彰が望まれる。この点についても、現地調査で痛感したことは、木屋平の過疎高齢化は急速で、廃屋のみでなく、廃畑、廃山も深刻で、その上、廃墓も目立つ。今のうちに文化財遺産として板碑の立地場所、数量等を含めた記録保存の学術調査を行い、一日も早く、板碑群として美馬市の指定文化財に登録し、文化財保護行政が実施されることを要望します。